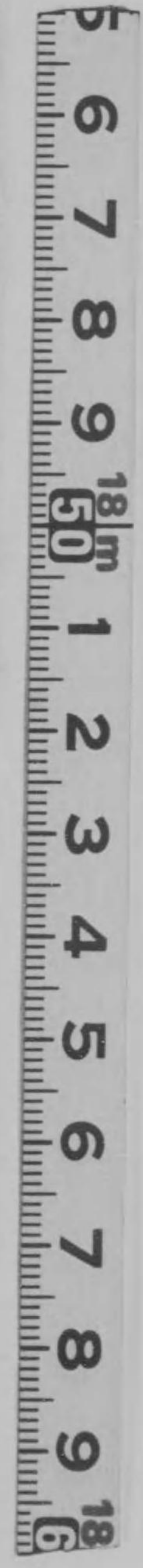


393

740

杞柳の栽培

国立国会図書館



始



ナ 8N37

業 副 利 有

柳杞の栽培

著 共

郎 三 彦 熊 小
六 善 串 大

新
版

京 東
版 藏 社 原 光



柳杞の栽培

著 共

小 熊 彦 三 郎
大 串 善 六

新
版

大 正
14 6. 13
交 内

東 京
光 原 社 藏 版

序

我國に於ける農村疲弊の度は日に月に甚しく、今にして之を救済せずんば國家の前途實に寒心に耐へざるものあり。而て農村振興の聲は頻りに隨所に起り之が對策の舉示せらるゝもの枚擧に遑あらずと雖も、其多くは理想論に走るに非ずんば甚だ迂遠にして到底現下の困憊せる農家の經濟を救ふに足らず、蓋し農村振興の策多岐多端なりと雖も行詰まれる農家の收入を増加するより急なるはなし。茲を以て著者等夙に適當なる副業の必要を痛感し之を唱道すること久し。而て實驗上杞柳の栽培は農家の副業として理想的なることを確信して獎勵したる結果、一般農業指導者並に農家の共鳴を得、近時質疑を寄せられ或は態々實地視察に來訪せらるゝも、年と共に多きを加へ、一々之に酬ゆるの遑あらざると斯業に關する著書に乏しく適當なる參考資料なきを遺憾とし、茲に杜撰をも顧みず本書を公刊するに至りたる所以なり。本書記述する所は極めて簡單なれ共専ら平易を旨とし、特に著者の經驗を緯とし之に當地方の栽培者並

に全國著名特産地に就き實地調査の結果を經として編纂し、附するに杞柳細工製作法を以てしたり。本書幸にして多少たりとも斯業發展の資となり、農村振興の一助ともならば著者の本懐とする所なり。

大正十四年四月

著者共識

有利副業 杞柳の栽培 目次

第一章 緒論	一
第一節 副業の必要と其選擇條件	一
第二節 理想的副業としての杞柳栽培	四
第三節 我國に於ける杞柳栽培の現況	九
第二章 性狀及來歴	一四
第一節 性狀	一四
第二節 原産地及來歴	一五
第三章 品種	二三
第四章 氣候、地勢及土質	二四
第五章 栽培法	二六
第一節 栽植期	二六
第二節 整地	二八
第三節 苗木の選擇及豫措	二九

第四節	栽植法	三二
第五節	補植	三三
第六節	中耕及除草	三三
第七節	摘芽	三四
第六章	肥料	三六
第七章	收穫	三九
第一節	刈取	三九
第二節	假插	四〇
第三節	剝皮	四一
第四節	洗滌及乾燥	四三
第八章	荷造及貯藏	四五
第九章	杞柳の生産年限及産額	四六
第十章	病蟲害	五〇
第一節	病害	五〇
第二節	害蟲	五一
第十一章	販路	五六

第十二章	杞柳細工品の種類	六三
第十三章	杞柳相場の立方	六七
第十四章	杞柳細工方法の一般	六八
第十五章	收支計算	七一

副業 杞柳の栽培 目次終

有利副業
杞柳の栽培

小熊彦三郎 共著
大串善六



第一章 緒論

第一節 副業の必要と其選擇條件

農業經營上副業の必要なる所以は今更茲に贅するの要なきも、殊に近年の如く主要農作物たる米麥作の悲境にある場合に於ては特に副業經營の急を痛感せざるを得ず。

昔日の農業經營の如く自給自足を以つて原則とし若し餘りある時は之を販賣するが如き極めて經濟觀念に乏しき時代に於ては自然副業の必要を認めざりしも、經濟組織の一變せる現代に於ては作物栽培の如きも多收必ずしも多利ならざる事あれば、農業經營上單に主要農作物たる米麥の生産増加を計るのみにては利益を擧ぐるに甚だ至難

の状態にあり。事実上米麥作のみに據る農家の經濟状態は頗る不振にして、之が生産費を嚴密に精算し自己の勞働賃金をも控除する時は概ね損失を免れざるを常とするは何人も否む能ざる所にして、事實は最も雄辯に立證しつゝあり。

元來農業の使命は人類生活の安定を確保するにありてあらゆる職業中至重至大の業務にして、農業の衰頹は延いて人類生活の不安を招致するものなるにより、食糧政策の如きは人類の共存共榮上大いに論議せらるゝは當然の事なりと雖も、翻つて農業者自身より農業を見る時は全く一種の企業に外ならざるを以て、農業が如何に人類の福祉を増進すべき貴重なる業務なりと雖も相當の利益を擧げ得ざる時は之を營むもの非ざるべし。

斯の如く農業は一面社會人類の安寧幸福を増進せしむべき公的職業なると共に、又一面に於ては個人的の營利事業なりと謂ふ事を得べし。故に人類の生活上に脅威を來すが如き事ある時は農家は假令一時不利益に陥るが如き事あるも犠牲的精神に生きざるべからず。之れ如何に米麥作が不利益なりと信することありても之を廢すべからざる所以なり。

斯の如く時に不利益を顧ず犠牲となるに於ては更に一面に相當有利の業あるに非ざれば農業の經營は極めて不安にして。如何に犠牲的精神に富むものと雖も到底永續し能ざるなり。茲に於て副業の價值愈々大に其の必要益々急なるを絶叫する所以なり。

現今の如く農家の經濟状態の極端に行詰まれる時に於ては、速かに適當なる副業を選択經營するを以て最大急務なりと雖も、之が選擇を誤る時は本業に支障を及ぼし農業組織を混亂せしめ反つて不利益を招く事あるを以て注意せざるべからず。

今副業選擇上注意を要すべき一般的事項を列舉せば左の如し。

- 一、可成本業の閑散なる時期に行ひ得べきものにして、本業に支障を來たさざるものなること。
- 二、如何なる土地に於ても相當栽培（又は加工其他經營）し得るものなること。
- 三、資金を要する事少く且つ資金の回收可成速かなるものなること。
- 四、栽培（又は加工其他經營上）上技術を要すること少く、且つ比較的勞力を要す

る事少く何人にも容易に行ひ得るものなる事。

五、生産品は貯藏又は輸送力に富み且つ販路確實にして可成利益多きものなる事。

第二節 理想的副業としての杞柳栽培

杞柳は性最も強健にして寒暖何れの地にも適し、且つ之が栽培には地勢及び土質を擇ぶことなく田畑、山林原野の別なく乾濕何れにも耐え、栽培容易にして資金及労力を要する事少く何人にも容易に栽培し得べく、且つ之が手入は殆んど冬期農閑の際にして、其の生産品は柳行李、バスケット等の原料として販路益々擴大しつゝありて收益甚だ多く農家の副業として理想的のものなり。以下聊か之が有利なる諸點に就き概説すべし。

一、杞柳の栽培は冬期農閑の期を利用して行ひ得るを以て本業に支障を來す憂なし。

杞柳は其の植付より施肥、刈取、剥皮等に至るまで手入の約九分通りは農家の最も閑散なる十二月より翌春四月頃までに終了するものなれば、主要農作物たる米麥作に

支障を來す事なきは勿論、果樹、蔬菜の栽培又は養蠶其他の副業經營上にも差支なく餘れる勞力を利用し得べく農業勞力の分配を年中繁閑なく平均せしむる上にも甚だ有利なり。

二、杞柳は寒暖何れにも適し、且つ如何なる土地にも栽培し得べし。

杞柳は性最も強健にして氣候の制限を蒙る事なく寒暖何れにも適し、北は北海道より南は九州に至るまで栽培せられ、何れの地方に於ても相當優良なる生産を擧げ、且つ品質に及ぼす影響も殆ど之を認むる能ず。

地勢及び土質も殆んど擇ぶ所なく能く各種の土壤に適し、全く他の作物の生育し得ざる土地にも盛に發育繁茂するを以て荒蕪地利用に最も可なり、殊に土中養分の多少水濕の過不足等も殆んど影響なきを以て乾燥甚しく到底他の作物の活着困難なる礮礮不毛の地、或は河川の氾濫常なき浸濕の地にも良く生育し、田畑山林原野の區別なく相當の生産を擧げ得るものは杞柳を置いて斷じて之を他に求め得べからず。

我國の如く河川の氾濫夥しく其沿岸に於ては時として收穫皆無に陥り、或は夏季旱

魁の爲めに折角の勞苦も全く泡水に歸するが如き事多き所に於ては、所謂水害地又は荒蕪地として全く利用せられざる土地甚だ多きにも係らず、晩近都市の異常なる發展は農村の優良なる耕地をも住宅或は工場敷地化し、さなきだに狭少なる農耕地は益々縮少せられんとしつゝあり。されば農業經營に當るものは開墾、埋立等に依りて耕地の増加を計ると共に一方栽培方法の改善に依り土地の集約的利用を期する事は甚だ必要の事に屬すと雖も、之等閑却せられたる荒蕪地の利用は更に一層緊要なるものあり。

三、杞柳の栽培には資金を要する事少く、且つ其の回収速かなり。

如何に有利なる事業と雖も資金を要する事多きか或は資金の回収甚だ遅きものにありては到底小資本家のよくする所に非ず。殊に中、小農及過小農の多き我國に於て行詰まれる農家の大部分は極めて小資本の運轉にすら苦しみつゝあるの状態なれば、多額の資金を要するものは例へ巨額の利益あるものと雖も之を開始し得ざるも多し。然れ共杞柳の栽培には資金と稱すべき程の金額を要せず極めて少額にて足る。即ち初年

度に於て一反歩につき苗木代金十二、三圓を要すれ共、杞柳は永年作物にして一度栽植する時は同一株より十ヶ年位相當の收穫を擧げ得べきを以て之を十ヶ年間に割當つる時は、一反歩の苗木代は一年僅かに一圓二三十錢の小額にて足り、肥料代の如きも毎年一反歩につき五圓乃至八圓位にて足るべきを以て如何なる小農と雖も容易に之が栽培に着手し得べく、且つ其の回収速かにして初年度より相當の收入を擧げ得るの利あり。即ち初年度（植付けの翌春）に於ては苗木代、肥料代、小作料及び自己の勞賃を償却し得るに止まるも、二年目以後に於ては少くとも反當八十圓乃至二百五十圓の收入を擧げ得べきを以て、勞賃其他生産費を控除して尙反當三、四十圓乃至二百圓内外の純益を收め得べし。著者は大正七年荒蕪地を開墾して一町二反歩栽培せしに大正十三年度の收穫高は一千九百七十貫匁にして價格二千九百五十圓餘を得たり。而て之が生産費總額は九百四十圓を要したる故差引二千十圓餘の純益を得たるを以て一反歩の純益は一百六十七圓五十錢にして、到底他の作物の及ぶ所に非ざるなり。然れ共杞柳の相場も又米價の如く年々變動を免れざるを以て今之を米の相場と比較すに、杞柳

の価格は概ね米價の騰落に支配せらるゝを常とし、過去十ヶ年間の相場に徴するに中等以下の土地に於ける杞柳一反歩の收穫は大體玄米四石の代價に相當し、眞に少費多穫の理想的作物と稱する事を得べし。

四、杞柳は栽培最も容易にして、技術と勞力を要すること少く何人にも容易に行ひ得べし

杞柳は一度栽植する時は同一株より十ヶ年位相當の收穫を擧げ得べく、之が栽培法は後章に述ぶるが如く極めて簡單容易にして、何等特殊の技術を要する事なく、婦女子と雖も従事し得べく、且つ勞力を要する事比較的少く栽培上に要する勞力は一反歩當り約二十人内外、剝皮及荷造人夫二十五人内外にして大部分は女人夫にして可なるを以て其勞賃は比較的低廉なり。

五、杞柳は貯藏に耐へ販賣に便なるのみならず販路確實にして收益甚だ多し。

杞柳は雨露に晒すことなく之を室内に貯藏する時は長期の保存に耐ゆるを以て、生

産時期に價格低廉なる時は一時貯藏し更に高價の機を見計ひて販賣し得るの利あり。

而て杞柳は主として柳行李及びバスケットの原料に供せられ、之等の製品は交通繁劇となるに従ひ益々需要増加するを以て常に原料不足の狀況にありて各製造業者は遠く朝鮮及び滿洲方面より野生の杞柳を購入して其不足を補ひつゝあるの狀況なれば、例令今後相當生産増加するとも決して之が販路に苦むが如き事なかるべく、其の収益は前述の如く當反三、四十圓以上二百圓内外の純益を收め得べきを以つて、杞柳の栽培は將來最も有望なり。之れ吾人が特に理想的副業として一般農家に推奨して己まざる所以なり。

第三節 我國に於ける杞柳栽培の現況

我國に於ける杞柳栽培は既に三百二十餘年前より行はれたりと雖も、其の盛に栽培せらるゝに至りたるは漸く近年の事に屬し、最近二、三年間の平均年産額は百五十萬貫匁、百二十萬圓内外にして、其栽培の最も盛なるは兵庫、高知、岐阜、長野、埼玉、福井等の諸縣なり、今参考の爲め最近十一ヶ年間の作付反別並に産額を示せば左の如

年次	作付反別	收穫高	價格
大正元年	九七七、七 _{町反}	六三〇、四六五 _貫	不詳
大正二年	八八一、九	五九六、七六四	不詳
大正三年	九四一、四	五三〇、八七六	不詳
大正四年	九五八、二	六六三、七八三	二八一、四七七
大正五年	一、〇九三、七	七六三、二八六	五七九、八三〇
大正六年	一、一九九、三	八二九、九〇二	七二三、三九〇
大正七年	一、三一二、五	一、〇〇一、七八三	八三九、五〇八
大正八年	一、三六八、四	一、一五七、四〇七	一、三三九、一三七
大正九年	一、四八四、〇	一、六八四、九二二	一、二〇八、一九八
大正十年	一、五二三、三	一、四九七、九〇一	一、四九六、八五三
大正十一年	一、五九二、〇	一、一二三、一六〇	九〇一、五二七

尙之を各府縣別に示せば左の如し。

府縣	作付反別	收穫高	價格
東京	七、七	八、三二五	七、六〇二
京都	五一、二	四三、二五〇	三八、三九〇
大阪	二六八、九	一六八、五五八	一四三、八二七
兵庫	一五、〇	一二、四七〇	一六、七七七
長崎	四六、九	三〇、六五五	三〇、六七八
新潟	一二五、二	一〇七、三八〇	八一、八三九
埼玉	九、二	一二、五〇〇	五、五五五
茨城	一、〇	一、五〇〇	一、五〇〇
栃木	二、三	一、六〇五	一、三五八
奈良	三、〇	二、七六〇	一、一〇四
三重			
愛知			

岡山 廣島 山口 山和 徳島 香川 愛媛 高知 福岡 大分 佐賀 熊本 鹿嶋 沖繩 北海道

四、七 | 一、二 | 二八、四 | 〇、二 | 三四、五 | 三四七、九 | 〇、三 | 六、七 | 一〇四、一

三、四四五 | 九一五 | 三三、七四〇 | 八〇 | 三七、〇三〇 | 八五、一〇八 | 五〇〇 | 四、一七五 | 七二、二二一

一、〇一六 | 八六三 | 三〇、一五〇 | 八〇 | 四四、三八八 | 一二三、五〇二 | 五〇〇 | 六、二六三 | 三九、六〇九

靜岡 山梨 滋賀 岐阜 長野 宮城 福島 岩手 青森 山形 秋田 福井 石川 富山 島根 島

一、五 | 二〇〇、二 | 一五六、九 | 二二、〇 | 一、八 | 一、〇 | 九三、四 | 四、三 | 八、八 | 四二、七

七五〇 | 二九一、三〇四 | 九八、六八一 | 六、一六七 | 五二〇 | 八〇〇 | 六三、一五九 | 一、九七五 | 八、九九四 | 二四、六〇三

九〇〇 | 一二四、九二四 | 一〇一、一一〇 | 二、五四八 | 四五〇 | 四八〇 | 六〇、三九三 | 一、九一六 | 六、二七五 | 二二、八三〇

第二章 性狀及來歴

第一節 性 狀

杞柳 *Salix Purpurea*, L., var. *multinervis*, Fr. et Sav. は川柳の一變種にして俗に行李柳と稱し、原始花被類楊柳科に屬する落葉灌木にして、莖幹細長く萌芽並に活着性に富み、葉は單葉にして互生し托葉を具ふ。花は一、二月頃開き單性にして花被を缺き穗狀をなし雌雄異株に生ず。花下には一個宛の苞を有し全邊なるか又は分裂す。盤は胚狀の鱗片より成る。雄花は多數の雄蕊集合し、雌花は單體の雌蕊を具へ二個の結合せる心皮より成り二個乃至四個の柱頭を有す。子房は一室にして二個乃至四個の側膜胎座を具へ多數の胚珠を含む。胚珠は倒生にして二層の珠皮を有す。果實は朔にして種子は其基部より多數の毛を生じ胚乳を含まず。

杞柳の莖幹は強韌にして之を剥皮洗滌する時は光澤を有し美麗なるを以て、行李、飯行李、鞆、バスケット、防火用手桶、牛馬飼料容器等の製造原料に供せらる。又佛

蘭西に於ては精巧緻密なる提籠、椅子、乳母車等製作せらるれ共、歐洲産柳杞は我が杞柳とは其の品種を異にし、枝梢概ね粗大にして細美ならざるを常とす。

第二節 原產地及來歴

杞柳は東洋の原産にして支那、朝鮮及我國には今尙ほ自生種あり。即ち我國原産の楊柳科植物四十六種中の一たる川柳の一變種にして我國も原産地の一なり。然れ共其の栽培せらるゝに至りしは今を去る三百二十餘年前天正年中兵庫縣城崎郡但馬に栽植せられしを以て嚆矢とす。其後寛文中に至り漸く盛況に達せしも其後著しき消長を認めず。明治六年頃までは稍々盛に栽培せられたれ共其後漸次衰頹し明治九年頃には殆んど廢絶せんとするの状態に陥りしかど翌十年に内國勸業博覽會の開設せらるゝに際し、之が製品を出陳して販路の擴張を計り、一般の注目を惹くにつれ同業組合を組織し製品の向上發達に留意すると共に栽培法を改良せしかば漸次盛況を呈するに至り。年と共に其の作付面積を増し製産額も増加せり。而て明治二十七年、八年日清戰役に際し行李の需要激増せし結果漸々原料の不足を訴ふるに至り、従つて價格頓に騰貴

せしかば杞柳栽培者は雨後の筍の如く輩出し、稻田變じて杞柳圃に化し、森林原野を開拓して斯業に従事するもの甚だ多きに至れり。然れ共こは戦後に於ける一時的好景氣に過ぎず其後明治三十一年頃より再び需要減退し引續き三十五、六年頃までは價格低落の道程を辿りしも、明治三十七、八年日露戦争に際し軍需品として多大の供給をなしたるため價格亦大いに騰貴せり。而て明治四十年頃より再び需要減退の兆ありしが此時は日清戦役後の如き影響は蒙らざれ共製品の販路抄々敷からざりし爲め價格又幾分下落せり。然るに大正三年歐洲大戰の勃發により三度需要激増し一般物價の暴騰と共に杞柳製品も亦稀有の高價を示し、大正八、九年頃までは殆ど其頂點に達し生産品一貫匁平均三圓以上を示したるも大正九年初夏以來諸物價一時に下落せし爲め杞柳も亦自然低落したれ共諸物價に比し割高なるを以て栽培は却て益々擴張せらるゝに至れり。

現今にては杞柳細工品としては但馬を以て本邦唯一の生産地となせ共、栽培面積の大なると品質の優良なる點に於ては高知縣八幡郡を以て最とす。

今我國に於ける杞柳製品生産額の趨勢を示せば左の如し。

年次	製造戸數	職工數	製品價格
大正元年	一、七九三	三、六六四	七五九、九四四
大正二年	一、五二一	三、二五〇	九五八、〇八〇
大正三年	一、五四四	三、二七七	九二八、五二四
大正四年	一、七九九	五、一六四	四、一六七、八一五
大正五年	一、九七一	六、〇一四	一、九八七、三五六
大正六年	二、三〇五	六、三九九	二、二八八、〇三四
大正七年	三、三四四	七、〇五一	三、二六六、六一六
大正八年	三、九七二	八、五九一	五、六四一、八七二
大正九年	三、一五八	四、八二九	四、五六九、一三九
大正十年	三、二七一	五、二五九	五、〇四三、一九九
大正十一年	三、四八六	五、七七五	五、三一五、二八六

尙但馬地方に於ける杞柳細工品の生産額を示せば左の如し。

品名	製造戸數	職工數		計數	數量	價格
		男	女			
普通行李	八四七戸	五一四人	三八〇人	八九四人	四三二、五四一	一、五一三、八九四
飯行李	二一九	一一	一一一	一二二	三六〇、五四六	一〇八、一六四
バスケット	五五六	五六二	二五七	八一九	四三九、六四〇	一、〇九九、一〇〇
靴	四一	四五	二	四七	二六、九八〇	一二九、五四〇
計	一、六六三	一、一三二	五〇八	一、八九二	一、二五九、七〇七	二、八五〇、六六二

右表によれば年生産額二百八十五萬圓以上に達しつゝあるも、其原料の大部分は高知縣及岐阜縣を主とし、島根、京都其他各府縣より輸入製造しつゝあり。

又製品の販路は内國を主とするも、朝鮮、滿洲、北米合衆國等に輸出し、米國への輸出額は年々三十四、五萬圓に達す。但馬に於ける柳行李の製造は編地と縁付とは總て分業にして編方は専ら豊岡町附近の部落に於て農家の副業として之に従事し、縁付は豊岡町にて仕上げを行ひ、飯行李及バスケット等は商家の婦女子の手内職として之に従事せり。近來行李の皮付及バスケットの金具附一般に行はれしかば婦女子にして

之の作業に従事するもの増しつゝあり。

長崎縣北有馬村に於ける杞柳栽培の沿革

明治四十四年長崎縣農會技師小川敢二氏兵庫縣但馬地方視察の結果、農家の副業として杞柳栽培の最も有利なるを認め之が栽培を奨励すべく翌四十五年縣農會に於て杞柳苗木の無償配布を行ひしにより、北有馬村に於ては八木武八、八木德隆、中村源兵衛、八木厚の諸氏各一反歩以上を試植せしを籃腸とす。

植付後生育良好にして一般民家に於ても其の栽培の容易にして總ての手入等農閑期に屬するを以て有利なる事を認めたるも、當時植付しものは種類面白からざる爲め大正四年更らに品質良好なる種類に改植し、現今にては殆ど其の當時の優良種なり。大正二年相當の原料を生産せしも之が販路に暗き爲め一般に於ても其の新植を躊躇し居りしを以て之が栽培を奨励するには、先づ之を消費する製造業を始め需給の關係を圓滿にする必要を感じ、大正三年更に縣農會の勸奨により時の村長吉田岩太氏は村營として杞柳工傳習所を設けんと計畫せしも事業の性質上寧ろ村農會の事業として經營

するの適當なるを認め縣農會より二百圓、村費より九十圓の補助を受け、大正四年三月一日始めて北有馬村農會杞柳細工傳習所なるもの生れたり。

右傳習所開始と同時に但馬より二名の教師を雇入れ傳習生男女二十名を募集し、銳意傳習に努めたれ共、元來職工養成が主眼なりしと經營者又不馴れの爲め年々收支償はず、經營益々困難に陥りつゝありしも事業其物に就ては前途に大なる光明を有し居るを以て村農會長柴田泰治氏は非常なる快心を以て多額の私財を投じ極力維持發展に奮闘せられたるも不幸、天は氏に其齡を貸さず遂に大正七年九月他界の人となりし爲め該事業も忽ち一頓挫を來し、遺憾乍一時中止せざるべからざる運命に至れり。依つて各傳習生に於ても或は但馬へ出掛け、練習する者あり或は自家に於て製造する者又は全く廢業する者等各自離散の悲境に遭遇せり。然るに折角之迄苦心慘膽して相當の傳習生も養成し既に基礎的準備は殆ど完了せし今日首腦者の死亡により再起せざるは甚だ遺憾なるのみならず又斯業に盡瘁せし柴田村農會長の亡き靈を慰むる所以にあらずとなし、村當局及有志者再興の議を凝し、會社組織にて經營せんとせしも會社組織

等にては取引關係等に於て敏捷を缺くの慮あるを以て再び經營困難に陥る如き事保し難きにより、熟議の結果開所當時より本事業の主任者たりし菅藤保雄氏の名義にて復活經營する事となり、今の技工養成所即ち之なり。

大正八年佐藤義照氏但馬より傳習を終へて歸村し細工傳習所を開き、又大正九年四月には笹田好太郎氏更に開所し、越えて大正十二年には八木敬次郎氏又々開場するに至れるを以て、現在にては本村内のみに於て傳習所四ヶ所、傳習生四十五名を有す。に至れり。

今製品の産額を示せば、大正十二年生産總價額五萬四百八十餘圓に達せり。栽培の状況を年次別に示せば左の如し。

年次	作付反別	生産高	價格
大正四年	一、五畝	〇	〇
大正五年	三、四	四五	五四
大正六年	五、八	二〇〇	二五〇

大正七年	七、二	五七〇	一、一四〇
大正八年	八、五	一、〇五〇	三、一六〇
大正九年	一六、七	一、七五〇	三、五〇〇
大正十年	一五、八	二、八〇〇	三、三〇〇
大正十一年	一八、五	四、一〇〇	五、三四〇
大正十二年	七五、〇	五、五〇〇	七、一五〇
大正十三年	一七五、〇	九、五〇〇	一三、三〇〇
合計	二五二、〇	二五、五二五	三七、一八四

右表に依れば價額に於ては年により變動あるにより逐年増加と言ひ難きも、栽培反別及生産數量に於ては年々歳々増大し、昨春(十三年)新植の分には良田に植付けしもの約二割に達し居れり。之只單に北有馬村に於ける丈なるも隣村は勿論縣内各地に於ても其の有利なるを認め、大正七八年頃より多少栽培するものあり。殊に最近二三年間に於ける各地の新植激増し、縣内及佐賀、熊本縣、或は朝鮮等に苗木を送附せし數多大にして、其の面積は本村反別の既に二倍以上に達すべし。

第三章 品種

細葉種、(小葉、赤莖)

葉細小なるを以て細葉又は小葉と稱し、又芽稍々赤味を帶ぶるにより赤莖とも稱す。莖幹細長にして品質最も上等なるを以て細緻なる細工は専ら此種を用ふ。されど其の收量比較的少く且つ浸水等に對し抵抗力弱く往々枯死することあり。

中葉種、(青莖)

芽に青味を帶ぶるを以て俗に青莖とも稱す。葉及び莖幹細葉種に酷似すれ共稍々大なり。品質上等にしてよく旱魃及び浸水に堪ふるのみならず收量甚だ多きを以て此種は現今各地方に最も多く栽培せらるゝに至れり。

大葉種、(葉廣、丸葉、白莖)

葉大なるを以て大葉又は葉廣、丸葉等と稱し、又芽白味を帶ぶるにより白莖とも稱す。莖幹稍々青色を帶び一見生育甚だ良好なるが如きも枝條粗大にして従つて髓部又

太く、木質脆弱にして品質劣等なるのみならず、收量又多からず、然れ共性極めて強く浸水に對する抵抗力最も強きを以て低濕地の栽培に適す。

尙此外赤目と稱し發芽に際して其芽特に赤色を帶ぶるものあれ共栽培せらるゝに至らず。

第四章 氣候地勢及土質

杞柳は他の作物に比し、氣候の影響を受くること甚だしく如何なる地方にても栽培し得。現に其の栽培區域廣汎にして本邦に於ては北は北海道より南は鹿兒島に至る迄栽培せられ、又朝鮮に於ても相當の成績を擧げつゝあるのみならず、滿洲地方には野生のもの叢生せるを見るも該作物の如何に寒暖雨雪の影響を蒙らざるかを窺知するに足る。其の品質に於ては、寒暖何處の生産物にても甚しき優劣なきが如きも、大體に於ては温暖の地方に栽培せしものは、生育良好にして伸長迅速なる爲め、枝葉の附着部遠きを以て、品質又良好なるのみならず、收量に於ても多稔なれ共、寒地に栽培せしものは之に反す。現に我が國に於ても四國及九州地方の生産品は常に其他のものに比し、優良なるは此の關係に基因するなるべし。

杞柳は山頂山腹の別なく、又平坦地と傾斜地を問はず如何なる地勢にても生育するものなれ共、陰地にして日當り悪く、風通し不良の地にありては生育不良にして、纖維粗弱となり、收量又少きを免れざるなり。可成高燥にして陽熱良く透射し、風通し宜敷き地を以て、最も可とす。柳に風折れ無しの諺の如く一般の風雪は、敢て差支なきも、海岸にて潮水の浸入する個所及潮風の當る場所は枯死する慮あるを以て、避けざるべからず。

杞柳は土地と云ふ土地には如何なる土質にても生育するものにして、例へば常に滯水せる濕地にも、年中乾燥せる山頂の開墾地にても、又河川の川原及堤塘、田畑の畦畔にありても、差支えざるものなり。然れ共其間自然收量、品質等に多少の差異は免れざる處にして、最適するは稍々肥沃にして排水佳良なる土壤とす。斯の如き地に栽培せられし杞柳は、發育迅速にして能く伸長し、品質優良にして枝條強靱且つ弾力に

富み、光澤鮮美なるを常とす。然れ共餘り肥沃の土質にて施肥過多なる時は、徒らに發育旺盛に過ぎて枝條粗大となり、收量は多きも品質劣悪なるを常とす。品質の優良なる點に於て我が國第一位の稱ある土佐柳の産地たる高知縣八幡郡地方の土質は概して肥沃ならざるも、其の肥培方法宜敷きを以て、其の聲價を博し居るを見ても却つて肥沃の土地には優良品の産出困難なるを察知し得べし。礫質及び砂質の地にありては前者に次ぐも、之に反し排水悪しき低濕の地又は瘠薄の土地にありては、成育遅緩にして光澤悪く枝條太く短く且つ生存年限も亦短し。

第五章 栽培法

第一節 栽植期

杞柳は總て挿木により繁殖するを常とす。之れ其性質萌芽の強盛なるが故なり。挿木の時期は秋落葉後より春發芽前迄は何時にても差支なけれ共、地温の氣温よりも稍々高き時を最も適當とし、普通は十二月頃より二月頃迄に行ふ。乾燥せる畑地又は山林原野の開墾地にありては苗木刈取後即ち十一、二月頃直ちに栽植するを可とす之れ乾燥地にありては植付初年に盛夏の候旱天打續く時は、新梢三、四尺に伸びたるもの往々枯死する事ありて不測の損害を招く事あるにより可成早く植付け、發根並に根の發育を促進し、從てこの被害を蒙る事甚だ少きは實地家の共に經驗する處なり。然れ共氣候寒冷にして低濕地に栽植するものは、春期發芽前に挿植するを可とす。若し濕地に秋冷の候挿植する時は往々土中に挿入せし部分腐敗を來す恐あり。要するに暖地にありては可成早く挿植し、寒地にありては乾燥地は早く濕潤地は稍々暖氣を待て挿植するを適當と認む。

杞柳は元來活着性非常に強靱なるにより如何なる土地、如何なる時期に挿植するも發芽するものなれ共、乾燥地に遅れて挿木せしものは其の當時は發芽生育するも、夏秋の頃旱天打續く時は、根部の發育之に伴はず枝葉のみ繁茂し居るを以て水分吸散の均衡を失し今迄立派の杞柳圃も忽ち枯木畑と化する場合あるにより著者は之を防止せんが爲め苗木仕立をなし、一ヶ年間桑苗養成の如く水田又は濕地に密に挿木し、根毛

を多數發生せしめ、之を翌春目的の乾燥地に栽植せしに其の成績最も良好なるを認めたり。杞柳は初年度に枯死せざれば、二年目よりは如何なる乾燥地にて如何に旱天續くとも決して枯死するものにあらざるにより、栽植初年の天候及植付方法により大いに其の成績に影響を及すものなり。

著者は又植付期非常に遅れたる四月十五日以後に一町餘歩の水田に挿植せしに、其の際は苗木は既に發芽し、新梢四五寸に伸びたるものを植付たるに殆ど全部活着したるは意外に感じたるも、其後の生育狀況は甚だ不良なりき。

第二節 整地

水田に栽植する場合は稻刈取後可成深く耕鋤し、馬把にて土塊を碎き、排水を良くする爲め八九尺位毎に巾二尺餘の溝を設け高畦となすべし。而して其の畦は平面になる様搔き均らし置くべし。尤も栽植すべき田區狹少なるものにおいて、別に排水溝を設けることなく、只だ畦畔に沿ひ僅かの排水路を設くるを以て足る。相當廣き田區にありては、前述の如く排水路を設けざれば春期發芽期に於て春雨停滯して、新芽四

五日間も浸水する時は、枯死する恐あり。又右排水溝は二三年目以後になりて杞柳茂するに至れば通路となり益々必要を感じるものなり。

畑地にありては前作物收穫後直ちに雜草を除き深く耕起し土塊を粉碎し、小區劃なれば其の儘平畦となし、大區劃なれば水田と同じく八九尺毎に排水溝兼歩通を設け置くべし。麥畑に挿木せんとするものは其の儘麥間に挿植し、麥刈取後直ちに中耕除草を行ふものにして別に整地を要せざるも可成休閑地を豫め整地して之に栽植するを宜しとす。

第三節 苗木の撰擇及豫措

苗木は秋落葉後刈取りたる柳條の中より直徑二分五厘位、即ち廻り小指大以上のものにして伸長六尺以上なる無傷無病のものを選り、根元より約五六寸位の長さによりて挿穂を作るべし。(挿穂の長さは土地の深さにより長さを異にするものにして、例へば耕土五寸なれば六、七寸、耕土七寸なれば八九寸と云ふが如く土地の深さより常に約一、二寸位長く切り其の一、二寸位は地上に露出せしむるものとす)切りたる挿穂

は下部を山形に削り挿入に便ならしむ。然し一時に多数の挿穂を作るには一本宛切り取る手数を省く爲め極鋭利なる押切（牛馬の飼料切り）にて五六本宛一束とし、皮の剥げざる様切り取るを便利とす。又土地強固ならずして栽植期早き場合は別に根元を山形に削る事なく只單に切りたる儘にて挿入するも差支へなし。

一枝條より切り取るべき挿穂は普通五、六本にして、最も適當なるは根部より約半分位なるも斯くては苗木多数を要するを以て、全枝條の三分の二位迄挿穂となすも、大なる差支なし。然れ共夫れ以上末端をも苗木となす時は活着不良なるのみならず、其後の生育又面白からず。

苗木用に供する樹齡は三年目位より五、六年目頃の母樹より取りたるものを最も好しとす。樹齡餘りに古きものは勢力微弱にして生育充分ならず。

挿穂に切り取りたる殘餘の枝梢は決して放棄することなく直ちに濕氣ある土地に二三本宛一束となし、三、四寸平方に挿し置く時は、四月初旬頃には發芽するにより、之を剥皮し、販賣する時は苗木代金の幾分にて償ふことを得る利益あり。

苗木の所要數量は一反歩につき大苗木は約三十貫、小苗木は二十餘貫、平均二十五貫位を普通とす。而して苗木一枝條は約十匁位とす。

第四節 栽植法

前記の如く整地を了し、苗木の準備出來上れば愈々栽植に着手す。而て植付の距離は土地の肥瘠により多少異れ共畦間一尺七八寸に株間七、八寸に植付るを普通とす。杞柳は細長の條幹を貴ぶものなるにより出來得る丈け密植する方有利なるが如く思惟し、畦巾一尺二、三寸、株間四、五寸に植付くるものあるも、斯くては二、三年目以後に至れば株張り大なる爲め全く空間なき様になり、刈取施肥、除草等に困難を感じるのみならず、收量却つて減退するを免れざるにより前記の如く畦巾一尺七、八寸、株間七、八寸位を適當とす。之れを植付るには先づ印繩を張り正則に長方形に植付けざれば後日の手入に不便を感じる事多し。挿穂は斜に挿入することなく、必ず直立に植付けざれば刈取及び中耕、除草の際根株を傷むる事あり。又挿穂を土中に挿込む程度は土地の深淺により一定せざるにより、挿穂の長さも又土地の深さにより切取るべき

事は前節に於て述べたるが如し。兎に角地上一、二寸位顯はるゝ様挿入するを最良とす。栽植に際し最も注意すべきは、挿穂の本末を誤り逆挿すべからざることにして、逆挿せしものと雖も、發芽伸長せざるにあらざるも枝條灣曲し、生育甚だ遲緩にして刈取の際に於ては根より抜ける等甚だ不成績に陥るものなり。

常に水分停滯し、又は時々浸水の憂ある低濕地にありては挿穂を長く切り水面より五、六寸以上露出する様高株仕立とするを宜しとす。此の場合には往々多數の發芽をなす事あるにより、上部二、三芽を残し、其れより下部にある新芽は全部掻き取らざるべからず。

一反歩の株数は普通七千株乃至九千株位とす。

第五節 補植

水田に栽培せしものは殆ど枯死するものなきも乾燥せる畑地等に於ては往々枯損苗を生ずる事あり。又中耕除草に際し、枯死せしむる事あり。或は前記の如く逆挿をなす事あるを以て、斯くの如きものに對しては必ず補植せざるべからず。而て補植は枝

條刈取後直に行ふを可とす。

補植すべき挿穂は、可成生育旺盛にして大なる枝條を選び必ず初年目刈取後に行ふことを忘るべからず。然らざれば補植苗は遂に一般のものと同一の生育をなすこと能はず補植の目的を達せざる事あればなり。故に補植用苗木として別に仕立て置き、補植の際は之を掘取り丁寧に補植する時は、一般の株と同様充分細根發生し居るを以て其後の生育に不同を生ずることなく最も安全とす。

第六節 中耕及除草

植付初年より二年目迄は新芽二、三寸に伸びたる頃第一回中耕除草をなし、其後落葉期迄に三、四回之を行ふ。殊に初年目には雑草の叢生せざる以前に必ず行はざるべからず、然らざれば雑草の爲生育不良に陥るのみならず、之に壓倒せられて遂に枯死する事少なからず。初年目は最も注意して如何に遅くとも入梅前迄には必ず一回以上の中耕除草を行はざれば、入梅中の雑草繁茂により中耕及除草愈々困難となるのみならず、折角の肥料も殆んど雑草に奪取られ非常に不利益を蒙るに至るべし。若し入梅

期中迄中耕及除草出来ざる時は、遺憾乍ら其後土用中には之を行ふ事を避け、只雑草中の繁茂を防止するに止め大なる雑草を刈取り、決して中耕及除草をなすべからず、夏土中に中耕除草をなす時は之迄雑草の爲杞柳の幼芽も日陰となり、生じ居たるものが急に旱天に晒らさるゝと且根部を打起す爲め土中に空隙を生じて乾燥を來たし遂に枯死するに至るを以て、斯くの如き場合には止むを得ず、只雑草刈取のみに努め、其後雨天の續きたる時を見計ひ、始めて中耕除草を行ふべし。

三年目以後は枝條の生育旺盛なると、又根部の發育も充分なるを以て、雑草の發生すべき餘地なく自然壓倒せらるゝにより別に中耕及除草を行ふの要なく、又實際に行ふこと能はざるに至るを以て、只だ柳條刈取後芽出肥を施す際併せて中耕除草をなすを可とす。

第七節 摘 芽

新植後入梅期に達する時は、新梢二、三尺に伸び漸次梢上に腋芽を生ずるにより、摘芽を行はざるべからず。元來杞柳は眞直なるものを貴び分枝せるものを嫌ふのみならず、枝付のものは其の價額非常に低廉なるを免れず。且つ剝皮をなすに當り行程進捗せず、總ての點に於て不利益なりとす。如何に優良の品種に高價の肥料を施し、周到なる手入れを施すと雖も、僅かに摘芽に於て不充分なる時は全く千刃の効を一簣に缺くの嫌あるを以て是非摘芽は周到に行ふべきを最も必要の業務とす。

摘芽を行ふに當り小枝を下に向けて搔き取る時は、幹の皮に傷を生じ木質部に傷痕の附着する慮あるを以て、必ず横に向け、急に搔き取るを良とす。即ち左手の指を以て腋芽の發生し居る直下を握り、右手の指にて小枝の中央部を握り急に手前に引くか又は向に押す時は既に小枝の四、五寸に伸びたるものと雖も容易に搔き取ることを得るものなるにより、決して缺類を以て切取るべからず。之れ剝皮後小枝附着部に其の痕跡を留むるによる。而して摘芽は萌芽發生の都度之を行ふものなれば決して一回にて完了すべきものにあらず。落葉期迄少くとも二、三回之を行ふの要あり。

尙初年目には挿穂長き時は一時に多數の新梢叢生するを以て、之の場合は一株につき生育良好なるもの二、三本を残し、他は根際より搔取り生育を齊一にし、品質の向

上を期すべし。斯くする時は收量も却て多きが如し。而して之を行ふには四、五月頃新梢發生の當時一回行ふのみにて可なり。

第六章 肥料

栽植既に終り新芽三四分に伸びたるを見計らひ、根元の土を少しく兩側に切り開き之に稀薄なる下肥又は配合肥料を水に溶解したるものを施用し覆土を行ふべし。其後土地の肥瘠、生育の良否により施肥するは勿論なるも可成初年目に於ては多量の肥料を施し充分根部の發育をなさしめ置かざれば、後年に至り如何に肥培管理を行ふも追付かざる感あり。又一方乾燥地に於て枯死するは根部の發育と枝葉の繁茂と相伴にざるに基因するものなれば、植付初年に於て旱天の際は特に稀薄の人糞を屢々施す時は枯死を免れ得るなり。而して初年目一反歩に對する施肥量は配合肥料等に於ては十貫乃至十五貫にて足る。然れ共施肥は可成一度に之を用はずして幾回にも分施する事肝要なり。

二年目以後に於ては柳條刈取後中耕除草をなすと同時に發芽前即ち芽出肥として施用するを宜しとす。勿論三年目以後に於て相當生育する柳圃にては發芽後に於ては到底施肥を行ふ事能はざるものなり。肥料の種類は如何なるものにては差支なきが三要素の配合其宜敷を得ざるべからざるは勿論とす。

元來杞柳は他の作物と異り收量本位に多量の肥料を施す時は却て枝條粗大となり品質劣惡に陥り優良の製品に適せざるを以て、過多の肥料は填まざるべからず。然れ共徒らに良品を得んが爲め、殊更に施肥を差控へるが如きは收量忽ち減するを以て、採算上甚だ不利とす。要は其土質に應じ、適當に施用すべきなり。殊に施肥上注意すべきは獨り杞柳のみに限らず一般作物に對し、窒素肥料過多なる傾向あるは甚だ遺憾とする次第なり。之が爲め却て品質收量を惡變せるが如き現況なれば、磷酸加里の加用は最も必要の事とす。

杞柳にありても窒素肥料過多なる時は徒らに枝葉繁茂し、枝梢は餘り蔓の如く伸び條幹屈曲し、木質柔弱となり、且つ剝皮歩合甚だ減少するに至るべきにより此の點に

特に留意すべし。今麥を反當一石五六斗位收穫し得る土地に付、標準施肥量を示せば左の如し。

肥料名稱	數	量	窒素		磷		酸素		加量
			里	忽	里	忽	里	忽	
堆肥		一〇〇		六〇〇		三〇〇		五〇〇	
大豆粕		二〇		一、四〇〇		三〇〇		三六〇	
過磷酸石灰		五		〇		七五〇		〇	
木灰		一〇		〇		二七〇		八三〇	
計			二、〇〇〇		一、六二〇		一、六九〇		

近時自給肥料次第に減少しつゝあるを以て勢ひ人造肥料を施用するもの多く、硫酸アンモニア、及配合肥料等を用ゆるもの増加せるは又不得已次第なり。

干鱈類を施す時は株を害し柳條赤色を帯び面白からずと稱するものあるも果して然るや大に研究の餘地あるものとす。

第七章 收穫

第一節 刈取

刈取の時期に二回あり。即ち夏芽刈とて夏土用中に生育最も旺盛なる新梢を選びて刈取るものと、冬刈と稱し秋落葉後より翌春發芽前迄に刈取るものとあり。

普通は冬刈にて十二月頃より翌春被岸頃迄に一枝も残さず刈取るものにして、之を行ふには鋭利なる桑刈鎌を以て柳條一尺以上のものは悉く根株一寸乃至一寸五分位の處より刈取り、次で一尺以下の小枝を刈取りたる後、其後に株揃と稱して最小の枝及枯枝等を根部より刈取るものなり。

夏芽刈取は肥沃なる土地に過多の施肥を行ひ、生育過ぎたる場合か、又は價格非常に高價なる場合に之を行ふものにして、夏土用入後直ちに刈取りに着手するを好期とす。而て餘り早きに失すれば幹質軟弱の缺點あり。晩きに過ぐれば柳條に赤斑を生じ木質脆弱となる慮あり。概して夏芽刈は冬芽刈に比し、木質白色なれ共青味を帯びず

光澤薄し、又柳梢は肉質充分ならざる爲め、乾燥せば枯澇し、皺を生ずることあり。従つて青柳に對する白柳（剝皮せし柳骨）の歩留り少し。之を行ふには生育最も旺盛なるを一株中より數本選抜するものとす。若し株の勢力微弱なるものに對して之を行ふ時は翌年の産額に多大の影響を及ぼすものなり。

株揃は植付の際餘り挿穂長過ぎて地上に露出せし部分高きとき、又は小さき枯枝ある時は必ず刈取らざるべからず。然らざれば翌年の新芽發生に際し、無数の小芽發生し生育不良に陥入るものなり。

第二節 假 挿

刈取りたる柳條は約三、四貫位宛を四斗桶の如き器に入れ其の長さものより順次抜き取り、大中小の三段位に区分し、之を各別に稍々濕氣ある土地に挿し、發芽するを待て剝皮に着手するものにして、之の發芽を促す爲め一時土地に柳條を挿す仕事を假挿と稱す。

之を行ふには大中小に區分せし柳を二、三本（小は五六本）宛を一株となし、濕氣

ある田地に四、五寸の間隔に倒れざる様挿入するものとす。畑地にありては先づ一條の溝を堀り其の溝の中に刈取し柳の根部を粗に列べ之に溝の周圍の土を切掛くる時は更に次に一條の溝を生ず。之の溝に又柳を列べ土を切掛くる時は幾筋となく、柳畦出来る事となる。斯くして春被岸頃に至れば、四、五分の新芽を生じ又根に新根を發するを待て、之を抜き取り愈々剝皮に着手するものとす。

假挿するに餘り密植する時は陽光の透射悪しき爲め新芽の發生遅れ、疎植する時は廣大の面積を要するの不利あるにより大木は四、五寸、中木は三、四寸、小木は二、三寸位の間隔を保たしむるを可とす。尙ほ大中小混植する時は中小木は常に日陰となり發芽非常に遅るるを以て、必ず各別に挿し置くべし。又假挿中倒伏する時は往々醗酵し、柳芽出でず枯死することあるを以て、風雨の場合と雖も倒伏せざる様充分挿入し置くべし。

第三節 剝 皮

刈取りたる杞柳の外皮を剝かず其儘のものを皮柳或は青柳、青芽等と稱し、外皮を

剥ぎ良く乾燥して直ちに細工用の材料に供し得るものを白柳又は白芽と稱す。而して青柳より白柳を得る歩合は大抵二分五厘より三分位の割合とす。即ち青柳十貫につき大木は白柳約三貫、中木は二貫五百匁、小木は二貫内外の歩留りとす。

假挿を行ひたる青柳は春の暖氣と共に漸次發芽し始め、水分を吸収して樹液の循環行はれ、新芽四、五分乃至一寸位に伸びたる頃（長崎縣にては四月上旬）を見計らひ晴天の日を見計ひ剥皮するものとす。

剥皮を行ふには別に機械と稱する程のものはなく、直徑四、五分位の女竹（母指大位のもの）を長さ一尺四、五寸に切り中央部を二、三寸薄く削り殺ぎたる部分を灣曲し、二つ折の缺み箸を作り、之を右手に持ち皮柳を左に握り可成膝の上に置き、最初皮柳の中央部を竹缺にて挟み、手元に引き抜く時は容易に皮と骨とを分離する事を得べし。次で梢の部を前回同様に行ふ時は、一枝は完全に剥皮せらる。然れ共斯くては生産多量の時は多大の日數を費さざるべからざるに依り、但馬地方及當地方に於ても近來は直徑三分位長さ一尺位の鐵棒を二つに折り曲げ、灣曲部より上端迄密着せしめ

其の尖端丈を少し開き、之を別に臺に打付けて使用するに至れり。之れ即ち柳條を其の鐵棒の密着部の内に割込み、手元に引く時は鐵棒の密着せんとする力の爲め剥皮せらるゝものにして、之の法は從來の竹箸よりも行程はるかに速かなり。

剥皮の難易は其の發芽の程度により非常に差異あるものにして、時期早くして發芽不充分なる時は剥皮甚だ困難なるを以て、無理する關係上柳骨爲に碎け價值なきものとなる。然れ共餘り遲きに過ぐる時は皮柳と白柳との歩止り減少し、且つ光澤を失する憂あり。而て兩者何れか利益なるかを考ふるに寧ろ後者の方採算上有利なるが如し。剥皮したるものは未だ骨柳乾燥せず滑味ある際に、桶に入れ其の長さものより梢端を握て拔取り、大木の内にても二、三段に區分し、後ち洗滌乾燥する時は後日荷造の際非常に便利なるのみならず選別良好なる故價格騰貴するの利あり。

第四節 洗滌及乾燥

剥皮したる柳骨は未だ乾燥せざる前に可成迅速に清水中にて充分強く揉み合せ澁氣及汚物の附着せるものを洗ひ去り、直ちに日光及風通し宜敷き場所に擴げて乾燥せし

む。此の際特に注意すべきは必ず河川又は溜池の附近にて剥皮すると、剥皮せし柳骨が其の日の中に乾燥する事を得る見込ある晴天の日に着手するにあり。剥皮せしものは猶餘なく直ちに清水にて洗はざれば澁皮及汚物を除去すること困難となり、又洗滌せしものは急に乾燥せしめずして一時停滞せしむる時は、柳骨赤褐色に變し、著しく光澤を損するものなれば普通は剥皮するものと、洗滌乾燥するものとは各々分業となり、洗方を追廻しと稱し、従て剥皮すれば従て洗滌乾燥に努むるものなり、而して之を乾燥するには、清潔なる砂地を除く外地上に其儘接し又は草上に直接並列するが如き事ある時は莖を汚穢せしむるを以て、洗滌せしものは一握許りの柳骨を三分の二以上位の處を藁一二本にて括り、根元を擴げて地上に干すか又は二、三間隔に杭を建て横に竹を渡し、之に寄せ掛け乾燥すべし。

剥皮せしものは普通は半日位にて相當乾燥するものなれ共、若し其の日の中に乾燥せざるか又は降雨に遭ふ時は色澤惡變して、價格非常に下落するものなれば晴天を見計らひ早朝より剥皮に着手し、午後三、四時頃迄に終了する様にすべし。

第八章 荷造及貯藏

洗滌乾燥せしものは藁二、三本を以て、一握位宛を一束となし梢部を括り、更に晴天の日を見計ひて一日間乾燥すべし。然らざれば只剥皮當日丈の乾燥にては充分ならざるに依り、往々青黴を生ずる事あり。愈々乾燥充分と認めたる時は各寸法毎に區分結束して濕氣を吸収せざる場所に貯藏するものなり。

今但馬杞柳商同業組合に於ける區分結束の規定を示せば左の如し。

一、杞柳は左の各號に依り束裝するものとす。

(一) 產地及白製期別に區分すること。

(二) 色澤枝付、皮付及枯損の程度別に區分すること。

(三) 伸長は左の通り區分すること。

1. 二尺三寸未満(飯木)
2. 二尺三寸以上三尺未満迄(小木)

3. 三尺以上七尺未満迄は五寸毎(大中木)
4. 七尺以上(大木)

(四) 根元五寸、上の廻り約一尺締を以て一把とし、葉二本又は三本にて梢部一ヶ所を括束すること。

(五) 伸長三尺未満のものは重量五貫匁、三尺以上のものは重量十貫匁を以て一束とし、各太さ一寸以上の強靱なる藁繩を以て上中下の三ヶ所を二本掛にて括束し、且つ二本掛縦繩を施して堅牢ならしむること、但し外國輸出の杞柳は此限りにあらず。

- 二、組合員は乾燥不充分にして品質劣變の虞ある杞柳は之を賣買することを得ず
- 三、組合員は検査合格商標の貼付なき杞柳は之を賣買することを得ず。

第九章 杞柳の生産年限及産額

杞柳の生産年限は土質及肥培管理の精粗により一定せざれ共、排水佳良なる壤土に

ありては適當の管理をなす時は二十ヶ年位は相當の收量あるべきも、砂土にして旱害を蒙り易きか又は濕潤なる地にありては普通十ヶ年位とす。何れの土地にありても初年より三年目迄は漸次收量増加するも四年目以後八、九年目迄は最も收量多き時期なるを以て、殆んど同一の産額を持続するものにして、其後は逐年收量漸減するにより十二三年目に達せば更らに改植を行ふを可とす。當地方に於ては既に十年以上に達せしもの多少あるも未だ左程樹勢減退の徴なきも、之れ必意土地良好にして肥培宜敷き爲なるべし。然れ老株は木質稍々脆弱にして光澤に乏しきを缺點とす。

杞柳の産額は樹齡及土質培養の關係により差異あるは勿論なれ共、今當地方に於ける普通のものに付、調査するに一反歩より得る平均産額を示せば大略左の如し。

初年目	白芽全量	三十貫匁
二年目	同	六十貫匁
三年目	同	百貫匁
四年目	同	百三十貫匁

杞柳の栽培

五年目	同	百三十貫	匁
六年目	同	百三十貫	匁
七年目	同	百三十貫	匁
八年目	同	百三十貫	匁
九年目	同	百二十貫	匁
十年目	同	百貫	匁

尙但馬地方の生産額を示せば左の如し。

初年目	白芽全量	二十五貫	匁
二年目	同	四十貫	匁
三年目	同	六十貫	匁
四年目	同	八十貫	匁
五年目	同	百貫	匁
六年目	同	百貫	匁

七年目	同	百貫	匁
八年目	同	百貫	匁
九年目	同	九十貫	匁
十年目	同	八十貫	匁

右表によれば當地方のものは但馬地方のものに比し、産額の多きは氣候温暖なると主として収量に重きを置き施肥稍々多き爲めなるが、但馬地方は寒氣稍々強きと、収量よりも寧ろ品質に重きを置きつゝある關係なるべし。

杞柳は又土地の肥瘠により其の収量に差異あるを以て、之が平均産額を示せば大約左の如し。

上等杞柳圃	白芽全産額	百八十貫
中等杞柳圃	同	百三十貫
下等杞柳圃	同	八十貫

第十章 病 蟲 害

第一節 病 害

杞柳黒枯病

本病は主として八、九月頃杞柳の枝梢に發生するものにして、初め枝條の先端又は中央に暗褐色の斑點を生じ、速かに部分にも擴がり病班部は漆黒色に變じ、病勢進む時は遂に枯死せしむることあり。本病は杞柳黒枯病菌 *Perillus Haraei*, Hori et Miyake. の空氣傳染によりて起るものにして、殊に株の老衰したるものに發生し易く又害蟲の喰害は發病の誘因となるものなり。

豫 防 法

- 一、發病の兆ある時は三斗五升式石灰ボルドウ液を撒布すべし。
- 二、被害の柳條は速かに刈取りて燒却すべし。

三、株は老衰前、即ち十年目毎位に更新すべし。

四、柳るりはむし、うちすゞめ等は本病を誘發するものなれば努めて之れを驅除すべし。

第二節 害 蟲

やなぎのるりはむし

やなぎのるりはむし (*Platiodera distencta* Blay.) は幼蟲、成虫共に杞柳の葉を喰害し被害大なる時は枯死せしむることあり。

成蟲は小形の甲蟲にして雄は體長一分三厘、雌は一分五厘内外にして稍々扁平なる橢圓形をなし、光澤ある黒藍色又は金綠色を呈し觸角及脚の跗節のみ暗褐色なり。卵は長橢圓形にして長さ三厘餘、淡黄色を呈す。幼蟲は孵化當時は體長二厘内外、頭部及硬皮板は黒色、胴部は暗黄色にして、各節に黒色の斑點を有し之より細毛を生ず。充分成長する時は體長二分餘に達し頭部は小圓形となり黒色を呈し、胴部は水色とな

る。蛹は淡黄色にして長さ一分餘あり。

年三回の發生にして成蟲態にて越年し、五月頃より出でて杞柳の葉を喰害し葉裏に十數粒宛卵す、孵化したる幼蟲は裏面より葉肉を喰ふが故に褐色となり枯死するに至る。蛹は葉下に尾端を以て垂下し第一回の成蟲は六月上中旬、第二回は七月上旬、第三回は八月上旬發生す。

驅除法

- 一、成蟲の墜落性を利用して箕附網を以て捕殺すべし。
- 二、除蟲菊加用石油乳劑の三十倍液を撒布すべし。
- 三、水一石に對し生石灰一磅、綠色砒一磅を溶解して撒布し毒殺すべし。

やなぎはむし

やなぎはむし (*Melasoma vigintipunctata* Scop.) も又杞柳の葉を喰害する小甲蟲にして、成蟲はやなぎるりはむしより稍々大きく體長二分五厘内外あり。全體黒藍色を呈

し楕圓形なり。觸角は稍々長き棍棒狀をなし先端の半部は黒褐色、殘部は黄色を呈す頭部黒色にして中央僅かに凹陷し、前胸背は少しく黒色にして平たく兩側は黄色なり前翅に十個乃至十一個の縦紋を有し其中或るものは縦に相愈合す。脚は黄色なれ共腿節端は黒藍色を呈す。經過習性未だ判然せざれ共成蟲は六、七月頃出でて杞柳の伸長最も盛なる時に喰害して被害を逞ふす。

驅除法

やなぎのるりはむしの驅除法に同じ。

右の外金花蟲科鞘翅目葉蟲科に屬する害蟲には

- るりはむし (*Melasoma aeneum* L.)
- どろはむし (*Melasoma Populi*, L.)
- かみなりはむし (*Haltica Coerulescens*, Baly)
- きぼしるりはむし (*Gynandrophthalma aurita*, F.)

等あれ共被害大ならず、驅除法は前者に同じ。

ひめこがね

ひめこがね (*Anomala ruf-cuprea*, Motsch.) の成蟲は杞柳の葉に小孔を穿ちて喰害するものにして、成蟲は略ぼ卵圓形の小甲蟲にして體長四分五厘内外全體黒藍色を呈し翅鞘に淺き縦溝と點刻とを有す。卵は土中にありて白色圓形なり。幼蟲の成長せるものは體長七、八分内外、頭部は褐色にして胴は乳白色なれ共老熟するに至れば淡黄色を呈す。尾節の下面に縦に二十對の刺毛を生ず。蛹は淡黄色卵圓形にして體長四分五厘内外あり。年一回の發生にして幼蟲態にて土中に越冬し翌春蛹化し、六、七月頃羽化して成蟲となり葉を喰害す。

驅除法

- 一、早朝冷氣の際は成蟲は運動不活潑なる故之を捕殺すべし。
- 二、毒劑を應用すべし。

ひめこがねの外鞘翅目金龜子科に屬する害蟲には

まめこがね (*Pupilia japonica*, Motsch.)

どろがねぶんぶん (*Euchlora eu p. a. Hopf.*)

の二種あり。驅除法はひめこがねに準ずべし。

うちすいめ

うちすいめ (*Smectiths pennis*, Walk.) の幼蟲は杞柳の葉を喰害するものにして其發生少きも、體形大なるが故に時として被害甚大なることあり。

成蟲は大形の天蛾にして體長九分乃至一寸三分に達し翅の開張二寸三分に及ぶ。全體灰色なるも前翅には黒褐色の雲狀斑紋を有し、後翅は淡黄褐色、中央に太き赤色の眼狀紋あり。卵は綠色長圓形、幼蟲の成長せるものは體長二寸五分内外に帶黄綠色を呈し白色の白斑點を密生し且つ第三節以下の體側に黄色の斜狀線を現す。蛹は黒褐色にして體長一寸内外あり。年二回の發生にして蛹にて地中に越冬し第一回の成蟲は五月頃、第二回は七月頃現れ、葉裏に點々産卵す。幼蟲は五月下旬及七、八月頃の二回

現れ葉を喰害す。

驅除法

- 一、幼蟲を捕殺すべし。
- 二、毒劑を應用すべし。

さざなみはまき

さざなみはまき (*Argyroplotea acharis*, Bult) の幼蟲は杞柳の心葉を綴るのみならず之を喰害する故被害大なり。成蟲は小形の蛾にして體長二分五、六厘、翅の開張五、六分にして全體灰褐色にして、前翅には細き波狀線と中央に半月形の灰白紋を附く。卵の形態は不明なれ共、幼蟲は體長六分内外ありて頭部は黄綠色にして胴は綠色なり。蛹は長さ二分五厘内外にして暗褐色を呈す。年二回の發生にして幼蟲態にて越年し四月上旬より現れて杞柳の心葉を絲にて綴り、其中にありて葉及び心芽を喰害する爲め枝條眞直に發育するを得ず側杖を生ずるが故に優良なる枝條を得ること能ず。五月中

旬頃加害葉中に化蛹し間もなく羽化して産卵し、第二回の幼蟲は六月中、下旬頃現れて再び加害す。

驅除法

- 一、幼蟲を捕殺すべし。

やなぎのしんとめたまばへ

やなぎのしんとめたまばへ (*Piplois* sp.) の幼蟲は杞柳の葉を卷縮せしめ心葉を喰害するものにして各地に發生すれ共殊に兵庫縣城崎郡地方に多し。

成蟲は微小の蠅にして體長五厘、翅の開張一分三厘内外にして體は赤褐色、羽は無色透明なり。幼蟲の成長せるものは體長八厘、圓筒形にして乳白色、尾端に二本の突起を具ふ。蛹は長さ一分二、三厘、淡黄色にして土粒を附けたる白色繭内に入る。年二回以上の發生なれ共經過明ならず。幼蟲は六月頃出でて杞柳の心芽及心葉の開かざる内部に入りて其葉肉を喰害するを以て、心部は萎凋垂下し伸長を止むるに至る。

未だ明かならず。今後の研究に俟たざるべからず。

第十一章 販路

杞柳栽培は前述の如く農閑期に行ひ、且つ其の栽培上土質を選ばず、小資本にして何人にも容易に營み得る理想的の副業として堆積するものなれ共、各地競ひて之が栽培をなすに於ては忽ち生産過剰となり販路杜絶し、殆んど三文の價值なき運命に遭遇せんことを慮ふるものあるは當然の理と云ふべきなり。

如何に有利多望なる事業と雖も時により一盛一衰は免れざるものにして、需要供給の經濟原則に支配せらるゝは元より已むを得ざる所にして、杞柳も又其の範圍を脱する能はず、同一道程を辿るは論を要せざる所とす。現に當地方に於ても、近年有利の副業として、栽培者激増しつゝあるも各栽培者に於ても斯の如く右も左も競て、栽培するに於ては遂に薪として處分せざるべからざる破目に陥らん事を憂慮し、三反新植

せんとするものは二反に、二反植付けんとする者は一反にと云ふ有様にして自然手控へ居る實狀なるにより其の栽培面積は實際の希望よりも常に幾割かの減少を見つゝある次第なれば、今後之が栽培に着手せんとする新計畫者には、當然此の點に大なる疑問を有せらるゝ事と信ず。

予又其一人なりしを以て之が栽培を奨励擴張するには、先づ第一に販路の如何を講究するにありと思惟し、先づ本邦に於ける著名特産地たる但馬につき取調べたる處によれば殆ど其の販路は無限と稱して可なるが如き狀況なるを認めたり。

但馬は兵庫縣城崎郡豊岡町地方の舊國名にして、北は日本海に面し、山陰鐵道の沿線にある一小邑にして、京都を去る約九十哩、大阪に至る百餘哩、山陽線に出づるには姫路迄約五十哩を要する處にして交通至便と云ふを得ず。一反此地に足を入る時は同地停車場の「プラットホーム」に杞柳及杞柳細工品の山積しあるに一驚すべし。更に附近の倉庫を窺へば又同一の杞柳關係品の充滿し居るには益々驚くの外なし。宜なるかな同地に於ける毎年の産額約三百萬圓、之に従事する仲買商の數二百戸に達し、之

が販路は内地は勿論、朝鮮、滿洲及北米等殆ど世界的に擴張し居るを以てなり。依て杞柳の消長は忽ち同地の盛衰に關係するものとす。然して之等の原料は各府縣より購入しつゝあるのみならず、前述の如く、朝鮮産及滿洲地方の野生品を買入れ居る状況なれば、今俄かに原料過多となり販路杜絶するが如き事なかるべし。元來避遠の地たる但馬へ一旦各地の原料集合し、此地にて細工加工をなし、更らに各地方へ散ずるは原料生産者及製品消費者共に不利の状態にあるは明なり。之れ必意各地の生産額僅少にして、其の生産地に於て製造を營むも不利なる爲め勢ひ不得止現在の状況を繰返しつゝある次第なれ共、之が栽培愈々増大し、原料を自由に得らるゝ域に達すれば必ずや製造業は各地に起り、従つて生産すれば従つて消費することを得。生産消費の關係自然圓滑となり、栽培者も又製品消費者も共に利益を收むるに至るべき事自明の理とす。

殊に交通は日に月に進み、人類の移動益々頻繁となるべきにより、自然之に伴ふ攜帶品の移動も多數となれば、旅行具として必要な杞柳製品の如きも増加すべきは明かなり、尙現在の如き製作品のみに限らず、尙進で各種の製品を工風作製するに至らば愈々其の販路を増大するに至るべし。

當地方に於て現在取引しつゝあるものは、當地方の生産額のみにては當地に於ける製品原料に尙不足しつゝあるを以て、栽培者は製造家と直接價格を協定し隨意賣買しつゝあるも、將來は共同販賣の法行はざれば品質の向上及價格の權衡を得ること困難なりとす。

若し一地方に栽培者のみにて製造業者なき時は但馬又は各地の製造業者に現品送り付け賣買するか、又は見本品を提出して價格決定の後取引するか何れの方法に依るも取引は容易なるべし。若し多數の商人を引き付け販賣せんとせば少くとも數萬貫の生産あるにあらざれば遠隔の地にありては商人入込み共同買付を喜ばざるを以て、寧ろ多數の産額あれば、より以上高價に販賣し得る利益あり。故に可成一地方に多額の生産を奨むる以所なり。

今參考の爲め但馬地方に於ける主なる杞柳の取引商を擧ぐれば左の如し。

兵庫縣城崎郡豊岡町京口	松井増太郎
同縣同郡同町中	渡邊嘉吉
同縣同郡同町新屋敷	古橋政太郎
同縣同郡同町九日市上町	山川圓太郎
同縣同郡同町同	今井國藏
同縣同郡同町滋茂	池口松藏
同縣同郡同町同	新免音次郎
同縣同郡同町永井	大西熊吉
同縣同郡五庄村上陰	北村虎之助
同縣同郡三江村庄境	黒坂新之助
同縣同郡八條村	八條村信用購買販賣組合
同縣同郡同村	九日市信用購買販賣組合

第十二章 杞柳細工品の種類及効用

杞柳細工品としては近來種々なる製作品あるも、從來は柳行李、バスケット、旅行靴及飯行李を主なるものとし、柳行李、旅行靴及びバスケットは需要最も廣く日常被服其他の容器として世人の賞用する所なり。今や交通機關大に發達し、内外人共に其旅行用として極めて輕便有利なるを認識し、外國重要輸出品として前途益有望なる物産となるに至れり。元來杞柳は水分を吸収する時は其の質膨脹し、水を保持する力あるを以て、滿洲地方にては釣瓶又は牛馬の飼料容器其他箕を製し、或は消防用手桶に使用するものなり。殊に柳行李は其質強靱にして耐久力強きと、内容物の多少に依りて自由自在なるは他の「トランク」又は支那靴の比にあらず。「バスケット」は形狀優美にして且つ携帶に便なれば、普通旅行者の必携品となれり。又飯行李は昔時大に流行せしも近時一般華美に流れたるにより漸次減退の微あるも夏日の辨當等には腐敗を防止保存力強く、且つ廉價なるを以て、今尙下級勞働者間に重用せらる。殊に軍需品

として莫大の需用あり。彼の日清、日露の戦役に於ては一時に數百萬個の供給に應じたる事あり。

今本場たる但馬地方に於て最も多く製造せらるる柳行李、鞆及バスケットの各種に付其の品名と大小形状を掲ぐれば左の如し。

柵柳細工寸法及絲入表

品目	長サ	幅	深サ	蓋	糸	身	蓋	入	身
大々馬	二尺八寸	一尺八寸	八寸	二六	二〇	一四	八	八	六
大馬	二尺六寸	一尺六寸	七寸五分	二四	一六	一四	〇	八	六
永尺馬	二尺四寸	一尺四寸	七寸	二四	一六	一四	〇	八	六
尺高	二尺二寸	一尺二寸	六寸五分	二二	一六	一四	〇	八	六
大尺	一尺九寸	一尺三寸五分	七寸	二二	一六	一四	〇	八	六
尺荷	一尺七寸五分	一尺一寸五分	六寸五分	二〇	一六	一四	〇	八	六
七寸ノ	一尺七寸五分	一尺二寸	五寸	二〇	一六	一四	〇	八	六
同	一尺五寸	一尺五分	四寸六分	二〇	一六	一四	〇	八	六

同三	一尺二寸五分	八寸八分	四寸二分	一八	一四	八	六	六
同四	一尺七寸五分	一尺二寸五分	五寸六分	二二	一六	一四	〇	八
同二	二尺	一尺三寸	八寸五分	二四	一六	一四	〇	八
深上	一尺三寸	一尺	二寸五分	二八	二四	二〇	八	六
大掛	一尺二寸	一尺	二寸五分	二六	二二	一八	〇	八
長帳	一尺二寸	五寸八分	二寸五分	二四	二〇	一六	〇	八
袈裟大	一尺	七寸六分	二寸四分	二四	二〇	一六	〇	八
鞆一尺六寸	一尺五分	一尺六寸	二寸三分	二四	二〇	一六	〇	八
同八寸	一尺二寸	一尺六寸	二寸三分	一八	一四	一〇	〇	八
同二尺	一尺三寸五分	二尺	四寸六分	二〇	一六	一四	〇	八
同二尺二寸	一尺五寸	二尺二寸	五寸五分	二二	一八	一四	〇	八
同二尺四寸	一尺六寸五分	二尺四寸	六寸五分	二四	二〇	一六	〇	八
バスケット大	一尺二寸	七寸	七寸	二四	二〇	一六	〇	八

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
小	中	一	尺	尺	寸	寸	寸	寸	寸
八	一		六	五	五	六			

以上の内普通賣口最も多きは、永尺、大荷、尺荷及バスケット、鞆類なるにより従て製造も此の種のもの多し。

次に行李一組に付原料使用高を示せば大略左の如し。

種名	量目
大々馬	一貫五〇〇匁
大馬	一貫二〇〇匁
永尺	一貫〇〇〇匁
大荷	六五〇匁
尺荷	四五〇匁
七寸一、二、三	九〇〇匁

第十三章 杞柳相場の立方

杞柳の賣買相場は常に變動するものなれ共、杞柳の價格は杞柳細工品の販賣相場の變動に基因するものなれば、今其製作品と原料たる杞柳との相場關係即ち製造家が原料買入の際自己製品と原料とを如何なる標準により相場を算定するかを知らざれば、只だ徒らに高價又は安價なりと稱するも基標なきものなれば、茲に其相場の立方を示さん。

今假りに大馬一個に付金五圓

右製造に對する工賃一圓八十錢とし。

之に更に絲代其他縁竹、ツック代其他諸原料代を八十錢とし。

大馬一個に要する杞柳の原料一貫二百匁とする時は

左式により杞柳一貫目の相場を知る事を得べし。

$$\frac{5.00\text{圓} - (1.80\text{圓} + 0.80\text{圓})}{1.200} = 2.00\text{圓}$$

即ち杞柳一ペ目の價格二圓が實價なるも製造家は之に對し、金利其他の儲等を見込約二割位安價に見積るにより實際の取引價格は一圓六十錢位とす。

第十四章 杞柳細工方法の一般

柳行李製造の業は生地編と縁付とは普通分業にして、更に之にツツは又別に行ふを常とす。

今行李を製作するには先づ原料を暫く清水に浸し、能く白芽に濕氣を帯ばしめ、乾燥せざる内に編製するものとす。然らざれば折る恐あり。編製中乾燥を防ぐ爲時に水分を吹き掛くる事あり。先づ原料の大小長短等同じきものを揃へ、其の本と末とを打違ひに列べ之を竹弓に麻絲を張りしものにて一本隔に柳條を引上げ其交叉せし處に編絲を通じ、既に貫通し終れば更らに引上げたる柳條を押へたる柳條を引上げ交叉せる處に編絲を通すこと始めの如し。斯くして順次進行し、編み終るものとす。之を製作するには至極簡易なるものなれば大體の方法を終得するには約三ヶ月位にて可なる

も實際單獨にて營業し得るに至るには更に一二年の練習を必要とす。

當地方各細工傳習所に於ける傳習規定は多少の差異あるも大要左の如し。

年 齡

男女共滿十四歳以上

傳習期間

イ、通勤傳習生は滿五ヶ月にて卒業、自食とし入所當日より向ふ三ヶ月間は一日金二十錢、後二ヶ月は金三十五錢を支給す。

ロ、年約傳習生は滿二ヶ年以上にして被服一切並に給食とし卒業の際は製作用器具一式並に開業資金として金百圓以上を支給す。

就業時間

(自四月一日 至九月末日) 午前八時より午後六時迄

(自十月一日 至三月末日) 午前八時半より午後五時迄

卒業後

一般農家副業として普及せしむる目的なるを以て、卒業後と雖も可成傳習所へ出場せしめ、工賃を支拂ひ技術の練習をなさしむ。

出場不可能又は遠隔の人には、原料器具を貸與し家庭工業として製作せしめ、製品は相當價格を以て引受く。

製作に要する器具は極簡單なるものにして編臺、庖丁、槌、竹弓、針、綴し、鋏、小刀等とす。

バスケットの製造は女子の職業に最も適當なるを以て、各地共女子之に従事するもの多し。之を製するには、白芽柳の大なるものを三ツ割り又は四ツ割に割りたるものを肉突又は千引と稱する器具にて骨皮と骨肉とを分離せしめ、其骨皮を暫時水に浸し濕氣を帯びたるものを一定の形により竹箆を編む如く編むものとす。然して縁及底蓋等は各々原料を異にし、底は行李製造等の廢物等を用ひ、縁は小木の優良なるものを使用す。蓋は割藤又は細小の優良品を以てす。

尙之等細工品一人一日の製作高は職工技能の優劣により甚しく差異あるも普通の

のを示せば左の如し。

- 一大 馬 二個半(身、蓋共五枚)
- 一永 尺 二個半(身、蓋共五枚)
- 一大 荷 三個(身、蓋共六枚)
- 一尺 荷 三個(身、蓋共六枚)
- 一バスケット 二個又は二日に一組(一組は大中小三個)

第十五章 收支計算

今當地方に於て實地につき調査し、尙今回生産品共同販賣に附したる價格の平均等より推算して、一反歩に對する收支計算を掲ぐれば左の如し。

第一年目

収入の部

一金四十二圓也

反當白芽收量三十貫匁代

支出の部

一金三十六圓四十錢也

但し一貫匁につき平均一圓四十錢替

内譯

一金十二圓五十錢

反當苗木二十貫匁代(一匁五十錢)

一金四圓四十錢

地据及植付人夫賃男二人、女四人

(男一人一日一圓、女一人一日六十錢)

一金五圓七十錢

肥料代、配合肥料二匁、大豆粕二玉代

一金三圓六十錢

除草及中耕人夫賃、女六人

一金二圓四十錢

摘芽 人 夫 賃、女 四人

一金二圓二十錢

刈取人夫賃、男一人、女二人

一金一圓二十錢

假挿及株揃人夫賃男一人、女二人

一金六圓四十錢

剝皮及荷造費 男二人、女七人

差引金五圓六十錢也 純益

第二年目

収入の部

一金八十四圓也

反當白芽收量 六十貫匁代

但し一匁に付一圓四十錢替

支出の部

一金三十九圓六十錢也

内譯

一金八圓二十錢

肥料代、大豆粕二玉配合肥料二匁代

一金三圓六十錢

除草及中耕人夫賃、女六人

一金四圓八十錢

摘芽 人 夫 賃、女 八 人

一金四圓四十錢

刈取人夫賃 男一人、女二人

一金一圓八十錢

假挿及株揃人夫賃 女三人

一金一圓八十錢
一金十五圓

害蟲驅除費、女三人
剝皮及荷造人夫賃男三人、女廿人

差引金四十四圓四十錢也 純益

第三年目

収入の部

一金百四十圓也

白芽收量百貫匁代 (反當)

但し一匁一圓四十錢替

支出の部

一金五十七圓二十錢也

内譯

一金六圓
一金六圓
一金三圓四十錢

除草中耕及施肥人夫賃男三人、女五人
摘芽人夫賃、女十人
害蟲驅除人夫賃 男一人、女六人

一金五圓
一金三圓六十錢
一金八圓二十錢
一金二十圓
一金五圓

刈取人夫賃 男二人、女五人
假挿及株揃人夫賃、女六人
肥料代、大豆粕二玉配合肥料二匁代
剝皮及荷造人夫賃 男五人女二十五人
害蟲驅除劑 其他雜費

差引金八十二圓八十錢也 純益

備考

第四年目以後は略ぼ第三年目に於けるものと大差なきを以て省略す。

大正十四年五月十五日印刷
大正十四年五月二十五日發行

杞柳の栽培與附
定價四十錢

著者 小 熊 彦 三 郎
大 串 善 六

發行者 盛岡市厨川館坂五六
及 川 四 郎

印刷者 東京巢鴨宮下一七九四
吉 田 春 藏



發行所

盛岡市厨川館坂五六
東京巢鴨宮下一七九四
光原社本店
東京光原社

振替東京六九五〇五番

#8N09

終

